１　水　稲

病害虫名	予　報　内　容			予　報　の　根　拠
	発生地域	発生時期	発生量	
苗立枯病 (ﾋﾟｼｳﾑ･ﾌｻﾞﾘｳﾑ)	県内全域	－	平年並	①５月の気温が平年並の見込みである。 ②防除が徹底されている。
苗立枯病 (ごま葉枯病)	県内全域	－	平年並	①前年の収穫期における発生量が平年並よりやや多かった。 ②５月の気温が平年並の見込みである。
苗立枯病 (もみ枯細菌病) (苗立枯細菌病)	県内全域	－	やや多い	①前年の収穫期にもみ枯細菌病の発生が認められた。 ②５月の気温が平年並の見込みである。
ばか苗病 (育苗期)	県内全域	－	平年並	①前年の本田における発生が平年並で少なかった。 ②種子消毒が徹底されている。
イネミズゾウムシ	津軽地域	(食害始め) 平年並	やや少ない	①５月の気温が平年並の見込みである。 ②前年は発生程度の高いほ場が一部見られたものの、発生面積は少なかった。
	南部地域		平年並	①５月の気温が平年並の見込みである。 ②前年の発生が平年並であった。
イネドロオイムシ	県内全域	(成虫初発期) 平年並	やや多い	①５月の気温が平年並の見込みである。 ②前年の発生がやや多く、越冬成虫数もやや多いと考えられる。

（１）防除のポイント

《５月の防除作業》

１半　旬	２半　旬	３半　旬	４半　旬	５半　旬	６半　旬
育苗後期	／	田　植　期		／	本田初期

・防除時期　← ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ →　← ■■■■■■■■■

・防除対象病害虫

△ｲﾈﾐｽﾞｿﾞｳﾑｼ
△ｲﾈﾄﾞﾛｵｲﾑｼ
△ｲﾈﾊﾓｸﾞﾘﾊﾞｴ
☆いもち病
(育苗箱施用)
(側条施用)

▲ｲﾈﾐｽﾞｿﾞｳﾑｼ
▲ｲﾈﾄﾞﾛｵｲﾑｼ
(水面施用)

注：△印は前年までの発生状況により防除する。
▲印は５月末の発生状況により防除する。
☆印は抵抗性の弱い品種や常発地で防除する。

【 苗立枯病 】
苗立枯病は苗が徒長軟弱なときに発生しやすいので、適正な管理に努める。健苗を育てるためには生育段階ごとの適温があり、緑化から1.5葉期までは30℃以上にならないように、1.5～３葉期では25℃以上にならないように、換気に努めるとともに、潅水もできるだけひかえる。

（フザリウム、ピシウム）
① 育苗中に極端な低温に遭遇すると苗の抵抗力が弱まるため、フザリウム菌、ピシウム菌による苗立枯病が発生しやすくなる。保温資材などを準備し極端な低温に備える。

（苗立枯細菌病、もみ枯細菌病）
① 育苗中の高温、過湿により発病が助長されるので、換気に努めるとともに、潅水もできるだけひかえる。
②発病苗は植えない。

（ごま葉枯病）
① 高温・過湿は発病を助長するので、十分注意する。
② 苗の発病程度が高まるほど移植後の生育が劣るので、発病のひどい苗は移植しない。

【 ばか苗病 】
① 田植前にり病苗（徒長苗、わい小苗など）を抜取り、本田に持ち込まないようにする。

【 いもち病 】
① いもち病抵抗性の弱い品種（ゆめあかりなど）や常発地などでは、Dr.オリゼ箱粒剤、ウィン箱粒剤、バイオン粒剤２のいずれかを箱当たり50ｇ、苗の上から均一に散布する。あるいは、10アール当り側条オリゼメート顆粒水和剤500ｇを同重量の水に混ぜてから、ペースト肥料に均一になるように混和し、側条施肥田植機で苗の移植と同時に施用する。

【 イネミズゾウムシ 】
① 防除の基本は、田植後に発生程度に応じて行うことであるが、例年発生の多い水田や他害虫が発生して同時防除を必要とする場合には薬剤の育苗箱施用を実施する。
② 側条施肥田植機で肥料施用時に防除する方法もある。
③ 箱施用を実施しなかった水田で５月６半旬に食害株率で６割を越えた場合は、農薬の水面施用により防除する。農薬等については県農作物病害虫防除等基準を参照する。
④ 食害株率の調査は、次のように行う。畦畔から中央に向かって、２ｍぐらい入った地点から、中央に向かって連続50株調査する。１筆当たりの調査ヶ所数は２ヶ所以上とする。

【 イネドロオイムシ 】
① 本年の発生はやや多い見込みであり、イネミズゾウムシ等と同時防除する。
② ＰＨＣ（サンサイド）剤、ＰＭＰ（アッパ）剤抵抗性の発現が認められる地域もあるので、防除効果が低下していると思われる場合には防除剤を替える。

【 その他の病害虫 】
① イネハモグリバエ、イネヒメハモグリバエとも全般には発生が少ない見込みであるが、例年発生の多い地帯では、本田発生初期に県農作物病害虫防除等基準に準じてイネドロオイムシなどと同時防除する。

(２)防除上注意すべき事項

① 粒剤を育苗箱に施用し移植すると、巻葉や葉先枯れなどが発生したり、一時的に初期生育が抑制されることがあるので、使用上の留意事項を厳守する。
② 粒剤の水面施用は、湛水状態で行い、散布後４～５日間は水を流さないようにする。

2　りんご

病害虫名	予　報　内　容			予　報　の　根　拠
	発生地域	発生時期	発生量	
モニリア病 (葉腐れ)	津軽地域	平年並	やや多い	①りんごの生態は平年並である。 ②消雪が遅れ、適期防除のできなかった所があった。
	南部地域		平年並	①りんごの生態は平年並である。 ②前年の実腐れの発生が少なかった。
腐らん病 (枝腐らん)	津軽地域	―	やや多い	①４月の発生量が平年よりやや多かった。
	南部地域		平年並	①４月の発生量が平年並であった。
黒星病	県内全域	平年並	平年並	①りんごの生態は平年並である。 ②５月の気温、降水量が平年並の見込みである。
ミダレカクモンハマキ	県内全域	平年並	平年並	①りんごの生態は平年並である。 ②越冬卵量は平年並であった。
リンゴハダニ	県内全域	平年並	やや少ない (一部園地で多い)	①りんごの生態は平年並である。 ②越冬卵量は平年よりやや少なかった。
クワコナカイガラムシ	津軽地域	平年並	平年並 (一部地域で多い)	①りんごの生態は平年並である。 ②５月の気温が平年並の見込みである。 ③越冬卵量はやや多かった。

＊その他の病害虫
　赤星病、うどんこ病は平年並に少ない見込みである。

(１)防除のポイント

【 モニリア病 】

① 芽出し10日後にスパットサイド水和剤又はベフラン液剤を散布する。なお、ベフラン液剤は本病に対して治療効果があるので、芽出し当時から芽出し10日後の間が不順天候で、多発が懸念される場合は、ベフラン液剤を選択する。
② 葉腐れ、実腐れは見つけ次第摘み取って処分する。
③ 葉腐れの多い園地及びその周辺では、開花直前にアンビルフロアブルを選択するか、それ以外のＥＢＩ単剤にトップジンＭ水和剤を加用して散布する。

【 黒星病 】

① 開花直前と落花直後の散布は防除上最も重要な時期であるから、できるだけ間隔をあけないで基準散布量を守り、防除薬剤を散布する。
② 開花期間が長引いた時は、満開が過ぎたら花が残っていても防除薬剤を散布する。

【 腐らん病 】

① 胴腐らんは泥巻きをするか削り取って塗布剤を塗る。
② 枝腐らんは見つけ次第切り取って処分する。
③ トップジンＭオイルペーストを使用して再発した場合は、削り取って他の塗布剤を塗るか、泥巻きを行う。

【 ミダレカクモンハマキ 】

① 発生の多い園地では、開花直前及び落花直後にアタブロンＳＣ、カスケード乳剤、ロムダンフロアブルのいずれかを選択し、同一薬剤を連続して散布する。

② 落花10日後頃に発生が多い場合は、ダーズバン水和剤、トクチオン水和剤、エルサン水和剤のいずれかを特別散布する。

【 リンゴハダニ 】

① 開花期にリンゴハダニの発生が目立った園地では、落花直後に殺ダニ剤を加用する。ただし、コロマイト乳剤はマメコバチに悪影響があり、薬害の懸念があるのでこの時期に使用しない。また、オマイト水和剤は薬害のおそれがあるので７月末までの使用を避ける。

【 クワコナカイガラムシ 】

① 薬剤散布だけに頼ることなく、粗皮削り、バンド巻きなどの耕種的防除に努める。

② 落花15日後頃に防除剤を散布する。ただし、発生が多い場合は、落花10日後頃、落花20日後頃に防除剤による胴木洗いを手散布で実施する。

3　りんご以外の落葉果樹

病害虫名	予　報　内　容			予　報　の　根　拠
	発生地域	発生時期	発生量	
（ぶどう） 灰色かび病	県内全域	平年並	平年並	①ぶどうの生態は平年並に経過している。 ②５月の降水量が平年並の見込みである。
（な　し） 黒星病	南部地域	平年並	平年並	①なしの生態は平年並に経過している。 ②５月の降水量が平年並の見込みである。
（おうとう） 灰星病 （花腐れ）	南部地域	やや遅い	平年並	①おうとうの生態はやや遅く経過している。 ②５月の降水量が平年並の見込みである。

(１)防除のポイント

○ ぶどう

【 灰色かび病 】

① 新梢の摘心や誘引を適切に行い園地内の通風をよくする。ハウス栽培では室内の換気に努め、過湿にならないように注意する。

② 新梢伸長期（新梢約20㎝）にユーパレン水和剤またはポリオキシンＡＬ水和剤を散布する。またスチューベンなどで黒とう病の発生が多いところではジマンダイセン水和剤を選択する。

○ な　し

【 黒星病 】

① 落花直後はビスダイセン水和剤またはキャプタン剤、落花10日後はキャプタン剤またはＥＢＩ剤を散布する。

② 天候が不順で黒星病の多発が懸念される場合は開花直前と落花10日後にＥＢＩ剤を選択する。西洋なし（フレミッシュ・ビューティー）の場合は落花10日後にジマンダイセン水和剤をＥＢＩ剤に加用散布する。

○ おうとう

【 灰星病 】

① 落花直後（満開５日後）にバイコラール水和剤を散布するか、キャプタン剤にトップジンM水和剤を加用して散布する。なお、雨の多い場合は晴れ間を選んで散布する。

② トップジンM水和剤の耐性菌が高率に出現している地域では落花直後にバイコラール水和剤を選択する。

③ 落花１週間後に、キャプタン剤を散布する。

4　畑作・野菜

病害虫名	予　報　内　容			予　報　の　根　拠
	発生地域	発生時期	発生量	
（小　麦） うどんこ病	県内全域	―	平年並	①４月中旬の調査では平年同様発生が認められなかった。 ②５月の気温、降水量が平年並の見込みである。
（小　麦） 赤さび病	県内全域	―	平年並	①４月中旬の調査では平年同様発生が認められなかった。 ②５月の気温、降水量が平年並の見込みである。
（小　麦） 赤かび病	県内全域	―	やや多い	①消雪が遅く生育は全般に遅れ気味であることから、出穂期が平年より遅くなると予想される。 ②５月の気温、降水量が平年並の見込みである。
（にんにく） 春腐病	県内全域	―	平年並	①４月中旬の調査では発生量が平年並であった。 ②５月の気温、降水量が平年並の見込みである。
（にんにく） さび病	県内全域	―	平年並	①４月中旬の調査では平年同様発生が認められなかった。 ②５月の気温、降水量が平年並の見込みである。

(１)防除のポイント

○ 小麦

【 うどんこ病、赤さび病、赤かび病 】

① うどんこ病、赤さび病の防除は発生初期と７～10日後の２回位、下葉にも十分付着するように散布する。

② 出穂期以降に降雨や濃霧が続く場合は、赤かび病の予防散布を徹底する。特に赤かび病の発生源となる紅色雪腐病の発生が見られるほ場では注意する。

③ トップジンM水和剤、同粉剤及びスミトップM水和剤、同粉剤は、耐性菌が出やすいので連用しない。

④ 石灰硫黄合剤はムギダニを同時防除できる。

○ にんにく

【 春腐病 】

① 降雨が続くような場合に発生しやすいので、雨上がり後の予防的な防除を徹底する。

② 腐敗株は伝染源となるので抜き取り処分する。

③ 有機物や肥料が過剰投入されたほ場では多発生する傾向があるので、肥培管理にも注意する。

【 さび病 】

① 気温が20℃前後と高めに推移すると飛散量が増加し、蔓延しやすくなる。

② 発病初期（下表の注を参照）が５月上旬～中旬となるようなほ場では、多発する傾向があるので注意する。

③ 下記の防除薬剤の散布時期と効果持続期間(散布間隔)を参考にして効率的に防除を実施する。なお、多発生が予想される場合には、下表の基準より散布間隔を短くする。

《各種ニンニクさび病防除薬剤の散布時期別の効果持続期間》

薬　剤　名	初発時期	蔓　延　期
アミスター20フロアブル	４週間程度	21日程度
ラリー乳剤	４週間程度	10～14日程度
ストロビーフロアブル	４週間程度	10日程度
バイレトン乳剤	４週間程度	７～10日程度
バイレトン水和剤５	４週間程度	７日程度

注）初発時期：越冬後に発病が開始する時期（発病初期のうちでも、ごく初期）。

発病初期：主に発病株率が増加する時期（被害程度は軽微であるが、株間での広がりが見られる。徐々に蔓延期に移る）。

蔓 延 期：主に発病度が増加する時期（株内での被害程度が増加する）。

5月の病害虫テレホン情報案内

（津 軽 地 域）　　電 話　0 1 7 2（5 3）0 0 3 3

月	旬	水　稲	りんご	畑作・野菜
5	上	育苗後期の苗立枯病防除	黒星病とミダレカクモンハマキの防除	にんにくの春腐病防除
	中	殺虫剤の育苗箱施用		
	下	イネミズゾウムシの防除	黒星病の防除	

（南 部 地 域）　　電 話　0 1 7 6（2 4）0 0 8 8

月	旬	水　稲	果　樹	畑作・野菜
5	上	5月病害虫発生予報について	5月病害虫発生予報について	5月病害虫発生予報について
	中		りんご落花直後の防除、おうとう灰星病の防除	にんにくの病害の発生状況と防除
	下	イネミズゾウムシの防除	りんご黒星病の防除、おうとう灰星病の防除	じゃがいも疫病の防除

なお、テレホン情報は、病害虫の発生状況により変更することがあります。